

地球のゆくえ

広瀬 隆

Takashi Hirose



集英社

地球のゆくえ

広瀬 隆

Takashi Hirose



集英社

地球ちきゅうのゆくえ

一九九四年七月二〇日 第一刷発行
一九九四年七月三〇日 第二刷発行

著者 広瀬ひろせ 隆たかし

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三
制作部 (〇三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

この惑星は、どこへ向かって進んでいるのだろうか。

古い過去から離れて、新しい軌道に乗るのか。

それとも、今までと変りなく円を描きながら、

太陽のまわりを回転し続けるのか、私は知らない。

鶴と鷺さぎは、よく似ている。似ているということは、違う鳥だということになる。ツル科とサギ科の挙動は、同じではないらしい。

人類は、同じような歴史を繰り返してゆくように見えながら、まったく新しい体験に飛び立とうとしているのかも知れない。それを現在、人間が「地球の混沌」と呼んでいるように聞こえる。人間は、ある状態を理解できないときに、好んでこの言葉を使うが、「地球はどこへ向かって飛んでいるのか……」と、疑問形で私たちが飛び続けることはできないだろう。きっとどこかに、行く先を定めなければならない。

はじめに

7

第一章ジリノフスキーの恐怖と怪奇現象

13

第二章「日本経済崩壊」の背景

21

経済崩壊はチエルノブイリから

22

膨大な失業者の発生

30

ロスチャイルド財閥の秘密

43

日銀総裁と国際金融マフィアの正体

64

第三章細川政権誕生の謎

71

細川護熙と天皇家

72

日本の政財界の闇闘

81

新体制への疑問

93

日本史を清算できるか

101

第四章カンボジア内戦の勝利者

107

シアヌーク国王誕生の真相

108

フランス軍閥の登場

115

カンボジアへの兵器供給メカニズム

124

第五章ユダヤ人と中東問題

137

反ユダヤ主義とユダヤ陰謀史観

138

ヘブロン虐殺事件

145

ユダヤ人の二層構造

151

中東和平の秘密会談

159

イスラエル建国とロスチャイルド家

165

第六章 世界的な金投機と通貨不安

173

ジョージ・ソロスとは何者か

174

中国経済の支配者

183

クリントン政権の参謀たち

188

マルコスの金塊発見の報道……

198

第七章 ガットと日本農業の未来

209

国産米が本当になくなろうとしている

210

ガットに暗躍する穀物マフィア

220

世界最大の穀物商社カーギル

225

ミネアポリスの穀物ファミリ

230

忘れられている自由化品目と農業

244

貿易黒字と農業問題

247

第八章 スイスと世界の金融マフィア

261

銀行の不良債権

262

宛町の外国人投資家

269

スイスの銀行家

274

第九章崩壊するロシアの未来

289

ジリノフスキー効果

290

帝政ロマノフ時代とソ連時代

296

亡命した帝政貴族の最新事情

303

モスクワ・マフィアの正体

311

第十章死の商人の巣窟「国連」

319

ユーゴ内戦の真相

320

ユーゴ内戦の武器密輸と三角貿易

332

国連と国際ジャーナリズム

339

日本のPKOに待ち受ける危険性

352

日本の軍事化の危険性

360

第十一章朝鮮半島と核兵器・原子力問題

373

朝鮮戦争の再発と自衛隊の出動

374

アジアの兵器マーケット

383

自衛隊の実態と人員

386

原子力産業の絶望的状况

391

調査についての付言

396

あとがき

402

索引

415

地球のゆくえ

アートディレクション

川島 進

レイアウト

スタジオ・ギブ

Mapイラスト

今崎和広 富宇加 淳

写真提供

共同通信社

WWP

マックス プレス

著者

カバー 「DRAGON」

Copyright ©1952 M. C. ESCHER / Cordon Art-Baarn-Holland / ハウステンボス

はじめに

最近、こういうことを体験した。

一九九三年秋に、チェコやハンガリーを訪れ、ブラハやブダペストなど東ヨーロッパの街を歩く機会があった。そこには、国境から道路に沿って店を開く闇市が延々と展開され、広大な自然の農地に、昔の魔法のごとく、突如として大マーケットが現われ、またそれが忽然と消えるかのように、不思議な世界があった。

こうした国の内奥へ足を運んでゆくと、さて今度は、とんでもない出来事が起こっていた。一カ月かけてようやく手にした金で、買うことができるのは、わずかソーセージ一本だと叫んでいる人が街の片隅にいるのだ。私が懐に手を入れてみると、こちらには、旅するのに必要な分だけ、そこそこの金があった。間違ってもそれは、大金ではなかった。ところでこの大金ではない金を、目の前の東ヨーロッパの人の生活費に当てはめると、今のところでは一生涯の給与所得に相当するということになった。

これは大事件である。

一体あの人たちの生き方は、どこが間違っていたのだろうか。

勿論、間違っていたところか、ただその場所に、ちょうど今の時代に生まれついたにすぎなかったのだ。私たち旅する者の、一体どこが彼らより優れているのだろうか。ジブシーやロシア難民たち、大道芸のバイオリンが奏でる音の調べは、誰の心も魅了せずにはおかない絶品のものであり、ただ恥ずかしくなるのは、こちらの心だけであった。何ひとつ悪いことをしたわけでもないが、これほどの差が人生に生まれてきた。しかしその差は、経済的なものであった。

さて、いずれが幸せか……

人類は、これほどまでに夥しい数の人々を、ゆがんだ生活に追いやる国際経済社会に頼っていてよいものだろうか。ここ何年か、誰もが「経済」の言葉を口にし、耳にもし、「不況」の二文字を舌にからませて喋る先生たちを眺めてきた。

しかし私は、待つていただきたいと言いたくなる。思うに、こうした先生がたのひとりでも、数年前に今日の状況を言い当てていただろうか。答は、どうやら否定形である。先生がたは、舌を二枚持つて喋ってきたのではなからうか。

そうなると、これからの未来、と言うよりわずか数カ月後のことでも、こうした諸説には信頼が置けないものである。

何が誤りの源だろうか。

実は現在、地球という星のうすい表面部分で火を噴いている出来事の数々は、経済問題ではなく、皮肉にも、経済という言葉を濫用することが問題だと思われてならない。

経済そのものをどこかで否定する考えが、私たちの心のなかにはある。きっと、誰の心のなかにもある。

しかし実際に東ヨーロッパのような状況がもつれ合つて、家のなかに足を踏みこんでくると、やがて感情が爆発して、血を流すことさえある。聞けば、東ヨーロッパのある国では、横行する自動車泥棒を捕まえるのに、警察が盗難車を使わなければ追いつけないという。盗難車とは、西ヨーロッパの車で、主にドイツのボルシェやBMWといった高級車だからである。泥棒がこうした性能のよい自動車を持っているので、それを追跡する警察もやはり盗難車を必要とするという、笑い話ではない実際の話だった。

それほど、強盗団の資金力が大きく、警察は貧困にあえいでいる。東ヨーロッパやロシアでは、このようにバルザックの小説を彷彿とさせる出来事が、日々展開している。全世界で、貧しい人々が子供を食べさせるために追い詰められ、犯罪に走っているのである。そのような犯罪に怒る人があるなら……そのような犯罪者を軽蔑する人があるなら、いま一度、ヴィットリオ・デ・シーカ監督の名画『自転車泥棒』を観ていただきたい。

また最近、日本の列車のなかで、イランからの出稼ぎの人と会つて話を聞く機会があった。郷里に小さな子供を残して、アジアを転々としながら職を探している若き父親たちであった。この人たちの職場をそちこちに当たってみたが、イラン人というだけで、ほとんど絶望的な状況だった。当座の生活費だけでも用立てようとしたが、彼らは悲しそうな顔をした。

色々と話し合った結果、この人たちが日本で働くより、早く帰国してイランの国がよくなるように、そこで力を発揮してほしいという私の考えを分ってもらった。旅費を工面して、いつか財閥になった暁には返してくれるという夢を約束して別れたが、これでは、社会的には何ひとつ解決にならないだろう。そうした人たちが、何万人、いや全世界には億を数えるほどいるのである。

日本人にも不安がある。また誰かがそうした不安を煽っている。煽るだけの火種として、経済

不安という名の不安がある。

実は存在しないものが、現実の不安に変るには、何と言っても大きな動機として食べ物の欠乏がある。自分の畑で食べ物を育てることができる農民には、こうした不安がないはずだ。ところが今では、農民までも不安にさせられる商業の流通機構が、頭の上にのしかかってきた。国家全体が、あちらの国でもこちらの国でも、世界経済という巨象の鼻にゆすぶられて、やがて前足で踏みつぶされようかという状況が来た、という。

だが、本当のところはどうなのか。

そう思わない人間がいてもよいだろう。

人生は、経済に左右されるものではないと私は思っている。人生の妙味は、大金を手にする緻密な頭脳にあるのではないだろう。おそらく人間は、別の妙味のために生きているに違いない。

一体、苦しい状況に追い詰められた人間の不安や憤怒の源が、どこからやって来たかを探ってみたいと私は思った。

日本の経済崩壊と新しい政治体制、カンボジアへの自衛隊の派兵、日米経済摩擦、ガットで強制される米の輸入自由化、土建業者と政治家の腐敗、銀行界の不良債権問題、ソマリアやユーゴスラビアなど世界各地の凄絶な紛争、ロシアの混乱、危険人物ジリノフスキーの台頭、クリントン政権の金融スキャンダル、北朝鮮の核開発疑惑、中東和平とイスラエルにおけるヘブロンへの虐殺、中国をはじめとするアジア全土における異常な経済過熱、ヨーロッパに台頭するネオナチの動き……こうした事実を目にしたがら、どうも報道されている雰囲気とは別の力がどこかに作用しているような気がしてならないため、私は私なりに、さまざまな裏を調べてみた。これらの出来事が、おそらく地球上で、鎖のようにひとつにつながっているだろうという予感がしたからで

ある。

その結果、“民族主義の台頭”、“ネオナチ”、“経済自由化政策”、“核開発疑惑”、“国際貢献”といった用語のどれひとつを取っても、世の中で進行している歴史の実情とは、整合しないものであった。そして私たち自身が、将来に希望を見出せるという確信を持っている。

数多くの事実を、目の前に並べて、見ていただきたいと願っている。それにはこの地球に、さまざまな方向から、やわらかい光を当てるのが大切だと思う。これまでのように一方向から、サーチライトで闇夜を照らすように強い光を瞬間的に当てるやり方では、影になった部分がほとんど見えないからである。

何よりも、雄弁なのは、事実この世に起こっている出来事である。

1

シリノフスキーの恐怖と怪奇現象

ひとつ、最近のロシアに出現した奇怪な人物の、かなり奇妙な事件についての説明からはじめたい。この説明は、ロシア問題を語るためでなく、本書全般にかかわる国際ジャーナリズムへの懷疑を知るための最もよい事例として、冒頭に述べておきたい。

主人公は、「ロシアのヒットラー」の異名をもらったウラジミール・ヴォリフオヴィッチ・ジリノフスキーである。

「軍需産業を民生用に転換するなどんでもない。ロシア人は、殺人兵器を世界中に売りまくって稼ぐべきなのだ。しかもロシアには強力な軍隊がある。まわりにあるアフガニスタンでもイランでもトルコでも、われわれの好きなように征服して、あの連中をこき使うべきではないか」面白いいことを喋る人間が現われたものだ。

「日本人が北方領土を返せというなら、もう一度、広島と長崎を再現することも考えよう。ロシアで威張り散らすドイツ人を追い出すためには、ドイツにチェルノブイリの悲劇を起こすこともためらう必要はない」

こうした狂気の言葉を吐き散らしながら、九三年一二月のロシア新議会選挙で第一党になった自由民主党の党首ジリノフスキーである。しかし不思議なことがその背後にあった。まず彼は、国際ジャーナリズムの世界でアドルフ・ヒットラーにたとえられ、ウラジミール・ヴォリフオヴ